

平成29年度 佐賀県立伊万里高等学校 学校評価結果

<p>1 学校教育目標</p> <p>○自然を尊び郷土を愛し、人としての優しさに満ちた豊かな人間性と、自ら考え正しく行動する自主自律の精神を育てる。(自律)</p> <p>○個性と創造性を伸ばす個に応じた教育を進めるとともに、自ら判断し、自ら学ぶ力を育成する。(創造)</p> <p>○国際化、高度情報化の進む社会の中で、せまい価値観にとらわれず、友愛の精神に溢れ、共生社会の担い手として、社会や地域の発展に貢献する人材を育成する。(友愛)</p> <p><b>キャッチフレーズ 「みんなが主役 ～明日の伊高はあながつくる～」</b>          校訓「自律」「創造」「友愛」を教育の基本とし、一人ひとりが主役であるということを実感し、理想を高く掲げ、自ら学ぶ意欲を養い、心身ともにたくましく、明朗で若さにあふれ、文化の創造や産業の振興など社会や地域に貢献するために、自分がなくてはならないという気概と情熱に満ちた生徒を育成する。</p>	<p>2 本年度の重点目標 ～地域の期待に応えることのできる普通科進学校を目指す～</p> <p>(1) <b>学力向上</b>              生徒一人ひとりの進路意識を高め、早い段階で目標を明確にし、進路目標実現のために生徒一人ひとりが自ら努力するように指導する。              早期に基礎学力の定着を図るとともに、進路目標実現に必要な応用力を身につけさせ、生徒一人ひとりの潜在能力を引き出し、最大限に伸ばし育てるように努める。</p> <p>(2) <b>自己有用感の育成</b>              自己有用感(自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということ)を、自分自身で認識する)を育て、自他ともに認め合うことのできる生徒を育成する。</p> <p>(3) <b>情報モラル教育の充実</b>              インターネットの急速な普及により生徒を取り巻く環境は複雑に変化して問題が多発している。このような情報社会を生き抜き健全に発展させていくために、身につけておくべき考え方や態度を育成する。</p>
--	--

**達成度 A：ほぼ達成できた**  
**B：概ね達成できた**  
**C：やや不十分である**  
**D：不十分である**

3 目標・評価

① 学力向上							
領域	評価項目	評価の観点(具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	・授業での主体的な活動 ・学習課題の効果的な活用 ・家庭学習時間の確保	・授業アンケートでの「集中して授業を受けた」の項目を「3」以上にする。 ・授業アンケートの「課題が学力向上につながった」の項目を「3」以上にする。 ・家庭学習調査で1・2年の平均家庭学習時間2時間以上、3年1学期段階で3時間以上にする。  (第1学年) ①第1学年修了時に、全員が第一志望の進路を詳しく言えるようになる。 ②高校一年生に求められるレベルで、次の7.1ができるようになる。 ア 予習と復習の方法と習慣が身についた。 イ 課題の意味を理解し、計画どおりに進める習慣が身についた。  (第2学年) ・大学入試に対応する学力の土台の確立 ・進路希望に応じた計画的かつ継続的指導 ・授業集中+家庭学習時間確保  (第3学年) ・受験生としての学習習慣の確立 ・基礎学力の定着と個に応じた学習内容の設定 ・進路目標の確立と進路達成	・「チャイムtoチャイム」の授業の実施ができるようチャイムの前の着席を日々呼びかける。 ・課題計画一覧の配布を活用し計画的かつ効率的な学習に取り組ませる。 ・生徒の主体的な深い学びにつながる授業研究を各教科で教科会議を通じ研究する。 ・家庭学習状況や授業内容の定着状況について学年・教科で定期的に検証・分析し改善につなげる。  (第1学年) ①について ・3年間を見通した指導計画をもとに、「自己理解」から「職業研究」へ、さらに「学問研究」につなげる指導を行うため、「総合的な学習の時間」と「ホームルーム活動」および「学校行事」のあり方を工夫する。 ・校外で行われるさまざまな活動や、英検・漢検への参加を積極的にはたらかせる。 ②について ・細かいところまで、ていねいに指導する。 ・生徒がその意味を理解するまで、根気強く指導する。 ・生徒が習慣づくまで、根気強く指導する。  (第2学年) ・生徒一人ひとりの進路保障のために学力向上に取り組み、2年次のうちに国英数の土台を築かせる。 ・難関大学、学部を目指す生徒たちの応用力の育成と基礎学力の育成のための添削指導や講座を計画的に実施する。また、模擬試験を有効に活用し、目標設定と振り返りを行わせる。 ・学年全体で授業を大事にする雰囲気づくりを徹底させる。朝特課3分前、授業1分前の準備、着席完了。 ・平日3時間、休日5時間の家庭学習時間を目標とし、課題や小テストの内容の充実・工夫を図る。  (第3学年) ・第1進路希望を堅持させ、安易に妥協させない。 ・予習→授業→復習のサイクルを中心に、家庭学習5時間以上を実践させる。 ・各模擬試験ごとに自己の結果を客観的に分析させ、不得意分野の克服に努めさせる。 ・学力層ごとに必要な指導を各教科で判断し、継続する。 ・国公立大学90名以上、難関大学及び医学科・薬学科に10名以上の合格者を目指す。	B	・授業アンケートの平均値で「集中して授業を受けた」の項目「3」5、「課題を学力向上のために取り組んだ」の項目「3」3で、課題計画一覧の配布や授業研究の成果があり、生徒自身は学習に主体的に取り組んでいる意識がある。 ・家庭学習時間は、1・2年生が平均2時間程度で、3年生の1学期では2時間半に満たない状況であった。  (第1学年) ①について 新しく取り入れた活動 「佐賀大学訪問(9月)」早い段階で大学を意識させることができた。 時期や内容の改善ができた活動 「教育実習生と語る会(6月)」実施方法を双方向へ改善。 「ふるさと再発見活動(12月)」調べ学習に終わらず、地域の課題提起と解決策の提案まで踏み込んで活動した。 「小論文学習(3月)」3年間の見通しを踏まえた実施計画ができた。 時期の再検討が必要な活動 「自己理解・職業研究・学問研究」を10月から12月に実施したが、1学期に実施すべきである。 ②について 改善ができた内容 「特別講座(7月～)」難関大志望者に対するハイレベルの指導を、年間計画を立てて実施することができた。 継続的な指導が必要な内容 「予習・復習の習慣」「課題の意味の理解と計画的な取り組み」アンケートによる全体への指導、教科担当者による個人指導を継続して行ったが、全国模試の成績向上につながらなかった。  (第2学年) ・放課後特別講座を継続的かつ計画的に実施することができた。国英数の基礎学力の養成と難関大学・学部をめざす生徒達の進路意識の向上に役立った。また、添削指導に続けて取り組む生徒も多数いた。しかし、模擬試験では、5教科受験に向けて十分な準備ができていない生徒が多かったように思う。早期に国英数3教科の基礎学力をつけておく必要がある。 ・1年次から続けていた月水金の朝の10分間読書を、2学期から「Column Reading」と題し2、3の新聞記事を読み考察する時間として利用した。社会の様々な分野の諸問題やその背景を知ること、学問や職業選択の一助となった。また、学習しやすい落ち着いた環境をつくることにも役立った。 ・進路希望別集会を3学期に2回行い、学問や職業選択について考察、調べの時間をとり、生徒の進路意識の向上を図ることができた。学校行事も多く、進路学習を行う時間を見つけるのに苦労した。校務分掌、1年から3年までの学年の連携をよりよく行い、進路指導を行っていかねばならない。 ・授業を大事にする雰囲気や学年全体でつくるため、1分前授業着席準備完了を徹底させた。各教科で小テストや課題の工夫も行ってきたが、家庭学習の時間はまだ少ない。  (第3学年) ・安易に妥協しない姿勢は堅持させることができたが、センター試験以降に弱気になる生徒も見られた。 ・家庭学習の時間が十分に確保できなかった。高校総体以降増加はしたが、例年の3年生と比較すると少なかった。 ・各模擬試験は有効に活用することができた。意識して不得意分野に取り組ませたが、学習の絶対量が不足していた。 ・学力層ごとの指導は教科によってばらつきが見られたが、個別指導には全職員で取り組むことができた。	・学習に対する取り組みは生徒自身ではよくできているつもりであるが、家庭学習時間に反映できていない面があるので、学習時間を増やす指導が必要である。また、始業前の着席指導を含め、中身の濃い物にするための授業研究や課題の出し方を教科や学年で引き続き研究していく。  (第1学年) ・活動の実施母体である校務分掌との連携を強め、引き続き3年間の見通しをもった指導計画を立案し、実行する。さらに、実施後の検証とその報告を必ず行い、学校全体に還元する。特に必要な項目は以下のとおり。 ・低学年段階の進路指導のあり方 今年度の実施内容をもとに、さらに改善を図る。 ・模擬試験を核とした学習指導法の共有 ・試験までの指導計画、試験結果の分析、次回までの指導計画について資料をつくり、会議を行う。  (第2学年) ・学年単位ではなく、1年から卒業時までのよりよい進路指導のあり方について、校務分掌・学年で連携して研究・改善を重ねていく必要がある。 ・将来を見据え、自ら動き、調べ、考察することができる生徒を育成するために、適切な時期に適切なしつけを行っていく必要がある。 ・模試の各教科での分析をしっかりと行い、授業や課題の内容の改善に取り組む。分析し、データを活用し、授業・特別講座・課題の内容を見直し、生徒の学力向上に役立てる。 ・特別講座や添削指導を引き続き粘り強く行い、生徒の進路保障に取り組む。  (第3学年) ・進路達成に向けては、基礎基本の指導を徹底する必要がある。 ・1、2年生のうちいかに学習の習慣をつけさせるか、自らの進路希望を意識した行動をさせることができるかがポイントとなる。
	◎教育の質の向上に向けたICT活用教育の推進	・学習効果を高めるICT機器活用 ・日常業務における効果的な活用	・「授業でICT機器が有効に活用されている」と回答する生徒の割合を80%以上にする。 ・連絡や調査をペーパーレスで行い、効率化を図る。	・職員一人ひとりが授業での電子黒板や学習用PCを積極的に活用する。また、そのような活用の機会について各教科で研究し、教材等を共有する。 ・日々の連絡や各種調査等を学習用PCを用いて行い双方のやりとりや集約等の効率化を図る。また、その方法について、学年や分掌で情報交換を行う。	A	・学校評価アンケートの「授業でICT機器が有効に活用されている」の項目で、「そう思う」と「ややそう思う」の生徒が合わせて80.3%であり、機器の活用は概ねよくできている。 ・連絡事項や講演後のアンケート、家庭学習調査などを学習用PCで行い、ペーパーレス化や集計の効率化が図れた。	・授業で電子黒板や学習用PCを活用する機会は増加しているが、教師によってその活用状況に大きな差があるので、教室内で活用方法の仕方について研究したり共有していく必要がある。 ・更に、各分掌や学年で連絡や調査などに学習用PCを活用し業務の効率化を図る工夫を行う。
	○進路指導	・進路目標の明確化 ・希望進路の実現	・進路に対する高い志を持ち、早い段階で自己の将来について真剣に考え目標を明確にし努力させる。 ・個々の希望進路の実現に向けた指導を行い、地域に信頼される進路実績を上げる。 ・センター試験受験者を学年の95%以上とする。 ・国公立大学合格90名以上、難関大学、難関学部(医・薬)10名以上の合格を目指す。 ・適切な情報提供や講演等を実施し進路意識を高める。	・朝特課の3分前着席完了を実践し、主体的な学習を促し学力の向上を図る。 ・進路講演会やオープンキャンパスを通じ進路意識を高めるとともに、県の合同学習会への積極的な参加を呼びかけ高い進路目標を持たせる。 ・進路希望調査(各学年2回)と進路検討会(3年3回)、進路情報交換会(1・2年各1回)を実施し、生徒の進路希望と成績を掌握し効果的な指導につなげる。 ・年間計画の模擬試験は原則全員受験とし、希望者に応じて難関大模試や看護模試を実施する。また、難関大講座・小論文講座の計画的な実施や就職希望者への個別対応などきめ細かな指導を行う。 ・進路閲覧室の利用を増やし、「進路の手引き」、「翔雲」などを通じた確かな進路情報を提供する。	B	・朝特課3分前着席完了は完全にできず、主体的に学習に臨む姿勢をつくるためにさらに指導が必要である。 ・3年生は9月に、1・2年生は1月に進路講演会をおこなった。生徒たちの反応も良く、進路意識向上につながった。県の合同学習会にも多くの生徒が希望し、参加した。 ・進路希望調査と3年進路検討会、1・2年進路情報交換会は計画通り実施でき、生徒の情報交換と教師の指導方針の共有に役立った。 ・難関大学の指導や小論文・面接指導では職員の理解と協力を得て熱心な指導ができていた。国公立大学のA・推薦入試では18名が合格し、昨年より4名増加した。 ・センター試験の出願は学年の98%に達した。	・1・2年次から普通科進学校としての進路意識を高めさせ、日々の学習習慣を確立させる。早期に受験勉強をスタートさせる。 ・3年間を見通した進路学習計画を立て実行すべく、総合的な学習やホームルームの時間の使い方を工夫する必要がある。 ・小論文や面接の個別指導に対する全職員による指導体制は維持していくと同時に、入試問題の研究や授業の改善工夫を教科内で検討するなどして指導力の向上を図る。 ・現行のセンター試験に替わる新テストの情報収集とその対策の検討を行う必要がある。
	○読書指導	・学校図書館の多面的な利用の促進 ・豊かな読書体験を持つ生徒の育成	・一人一人の生徒や教職員のニーズに配慮した図書館運営に努める。 ・朝の読書や校内読書会を通して、良書に触れる機会を増やす。 ・年間貸出冊数の目標1,800冊(生徒1人3冊)	・新規購入図書を「図書館だより」だけでなく、集会等でも紹介し、図書館利用を呼び掛ける。 ・「読書」だけでなく、「自学自習」の場として図書館利用をアピールする。 ・「知の泉」を使った朝の読書、「作品論コンクール」や「ビブリオバトル」による校内読書会など本校独自の取り組みを継続し、生徒の読書レベルの向上に努める。	B	・「図書館だより」を毎月発行や昼休み・放課後の図書館利用生徒の増加などもあって、4～1月の貸出冊数が1,554冊(職員除く)となり、目標(1,800冊)達成が見えてきた。 ・「作品論コンクール」「百人一首大会」などの行事を通して、本校の文化的レベルの向上に寄与できた。「知の泉」については見直しが必要である。	・「図書館だより」による本の紹介とともに書籍の配列を工夫するなど環境整備を進める。 ・「利用者カード」を全生徒・教職員に配布して、図書館利用を促す。 ・朝の読書の時間は「知の泉」ではなく、各自が準備した本を読む時間とし、クラス文庫の整備も進める。
	○伊高はちがめプラン	・郷土(ふるさと)の自然と文化、歴史の理解 ・進路啓発	・「伊万里学」で地域文化の体験活動をする。(1・2年生) ・「キャリア教育」の視点に立った学問研究や職業研究をとおして、進路意識を高める。 ・校外での生徒の体験活動への参加を積極的に奨励し、生徒の参加を促進する。	・「伊万里学」の研修内容を充実させる。 ・職業セミナーや大学の出前講座や様々な講演会を実施し、系統的組織的な進路啓発を行う。 ・校外活動への積極的な参加を呼びかけ、進路意識を高める。また、進路啓発のために校外活動発表会を実施する。(日本の次世代リーダー養成、サイエンスキャンプ、聞き書き甲子園、女子中高生夏の学校、県青少年派遣プログラム等) ・「佐賀語り」を活用し、佐賀を誇りに思う生徒を育成する。	B	・ふるさと再発見活動や「伊万里学」講演会を通して、地域に対する愛着を定着させることができた。 ・職業セミナーや大学の出前講座については予定通りの実施ができ、生徒もそれぞれの希望の進路について意識を高めることができた。 ・多くの生徒が校外活動に積極的に参加し、有意義な研修ができた。 ・「佐賀語り」を総合的な学習の時間で活用し、佐賀を誇りに思う生徒の育成ができた。	・講演会やセミナーの講師の選定については、より生徒のキャリア意識を高めることができるように、今後も検討を続ける。 ・本年度のふるさと再発見活動を基盤として、郷土の現状だけでなく今後の展望を見据えた活動を継続する。 ・理数系のプログラムについては理数科の先生方との連携を深め、より積極的に呼びかける。 ・「佐賀語り」の活用について、朝の読書との連携を模索する。

② 自己有用感の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・思いやりの心の育成 ・清掃活動	・自己有用感を育み、自他ともに認め合うことのできる生徒を育成する。 ・健康で安全な学校生活を送れるよう、環境整備と保全に努める。 ・清掃指導の徹底を図り、学習環境を整える。	・各集会や日々のホームルームにおいて、自己有用感を育成するような講話を行う。 ・スクールカウンセラー等に協力していただき、早期に悩みの解決を図る。 ・毎月安全点検を実施し、校内外の危険箇所を把握することができた。 ・落ち着いた学習環境を整えるため、清掃活動を全職員・全生徒で実施する。 ・個人で出したゴミの持ち帰りについて徹底を図る。 ・全校生徒による地域清掃ボランティア活動を、9月中旬に実施する。	B	・早期に悩みの解決を図るよう速やかに対応はしたが、クラスや部活動での人間関係の悩みを訴える女子生徒が多かった。 ・安全点検は、職員の協力により毎月実施し、校内外の危険箇所を把握することができた。 ・掃除については、生徒の取り組み状況は良いが、教室ロッカーの整理整頓が十分でなかった。	・今年度から始めた「生徒理解カード」を一層充実させ、生徒の悩みや「気になる生徒」の早期発見と適切な指導に取り組んでいきたい。 ・定期的に保健委員でロッカーの点検し、整理整頓が不十分な生徒に注意喚起をする。
	●健康・体づくり	・望ましい生活習慣の形成 (自主的な健康管理)	・毎日の朝食摂取を目指す。 ・定期健康診断の結果に基づく、早期治療への啓蒙を図る。 ・ICTを活用した保健指導の充実を図る。	・保健だよりを通して、朝食の必要性また欠食の危険性について啓蒙していく。 ・健康診断の結果について、保護者に周知徹底しながら、早期治療へと導く。 ・健康診断や保健室利用を通して、自己の健康に関心を持たせ、生徒自身が健康課題を解決しようとする力を育てる。 ・朝や帰りのホームルームで、健康づくりのための啓蒙を生徒保健委員を通して発信する。	B	・健康診断の項目ごとに「健康診断だより」を発行し、健康診断の意義を理解したうえで受診できるよう指導した。目標である専門医療機関への早期受診はできているものの、100%ではない。 ・健康づくりのための啓蒙を、生徒保健委員を通して発信することができた。	・健康診断結果を踏まえた専門医療機関への受診率を向上させるため、健康診断後の事後指導の時間を設ける。 ・生徒の実態に応じた内容の保健指導を実施する。
	●いじめの問題への対応	・いじめのない学校づくり	・いじめの早期発見に努める。 ・方一いじめが起こった場合、その解消に全力を挙げて取り組む。 ・生徒との信頼関係を築き、生徒がいきいきとした学校生活を送れるように留意する。	・生徒の気持ちを敏感に受けとれ、共感的に理解し、生徒の自己決定を促すように努める。 ・生徒の実態をきめ細かく把握するように努める。 ・学期に1回、いじめに関するアンケートを実施する。 ・スクールカウンセラーや教育相談担当・養護教諭と連携して、いじめの把握、迅速な対応を図る。	A	年間いじめ覚知件数は3件、認知件数は2件であった。生徒の訴えもあり、保護者との連携を取りながら早期に解決できた。中には、ふざけ合いからいじめに発展しているケースもあり人間関係の希薄さがうかがえる。今後は、その点についても指導していく必要がある。	いじめアンケートは毎学期に行うことは継続していきたい。早期の発見も大事であるが、今後はいじめを起こさない友人関係を作っていくような指導を行いたい。
	○生徒指導	・基本的な生活習慣の確立 ・規範意識の育成	・東生徒指導連盟規約・校則の遵守 ・登下校の時間の厳守 ・SNSの利用モラルの向上 ・交通安全指導の徹底  (第1学年) ・事故やトラブルのない、穏やかな毎日を送る。  (第2学年) ・挨拶・掃除・礼儀の徹底 ・規範意識やSNS利用を含めたモラル意識の向上 ・読書の習慣の確立  (第3学年) ・受験生としての生活習慣の確立 ・最上級学年としての意識の涵養	・生徒指導について全職員の共通理解を図り、全職員で指導する。 ・完全下校時刻19:15を厳守するよう下校指導を行う。 ・集会、HRを利用しネットでのトラブルを未然に防ぐよう指導する。 ・自転車の安全点検を実施し、駐輪場での施設指導を徹底する。  (第1学年) ・すべての場面で「5分前行動、3分前着席」を徹底できるよう、職員全員ではたらきかける。 ・正副担任が協力し、複数の職員でホームルーム経営を行う体勢をつくる。 ・放送での生徒の呼び出しを極力控え、職員が教室に向いて生徒と関わる場面をつくる。  (第2学年) ・学習や生活の基本となる挨拶、掃除を自ら進んでできる生徒を育成する。 ・伊万里高校生として、また中堅学年としての自覚を持ち、学校行事や部活動、ボランティア活動等を通して、規範意識や社会性を高めさせる。 ・SNSの利用を含めて、自他ともに尊重し、思いやりをもった行動、正しく判断し行動できる生徒を育成する。 ・朝のホームルームが始まる前の10分間を有効活用し、読書の習慣化と落ち着いた学習環境づくりを徹底させる。  (第3学年) ・受験生として、学習を中心とした生活のサイクルを確立させ、集中して学習に専念できる環境を整えさせる。 ・服装・頭髪・挨拶などの全てに規範となるような意識・態度を醸成する。 ・学校行事などを通して、社会性の涵養・自己の向上に努めさせる。	B	・全職員による生徒指導への取組は、改善点はあるものの共通理解は図れた。 ・下校時刻は、遵守が十分ではない部活動もあったため、継続的な指導が必要である。 ・ネットトラブルは2件あったが、2件とも個人のURLの掲載が問題であった。しかし、昨年よりは減った。 ・自転車の施設指導が十分ではなかった  (第1学年) ・始業前の昇降口での登校指導、集会時や授業時に職員自身が先に入って指導を行うことで、時間前に集合準備を済ませる習慣をつけることができた。 ・生徒への指導・支援に対する正副担任の協力体制、放送に頼らない生徒との接点づくりは実現できた。 ・「己はどうあるべきか」「人とのように関わらるべきか」等、人としてのあり方を学ぶことは、引き続き必要である。  (第2学年) ・学年集会、学年・学級通信を通して、あいさつや掃除がきちんとできる人、思いやりをもち正しく判断し行動ができる人になろうと伝えてきた。学年通信では、学年団の先生方のコラムを掲載し、先生方の経験談や思いを伝えた。 ・学年団の先生方全員の協力により、朝の10分間を週に3回有効に利用できた。課題をすすめる生徒も中にはいたが、読書の習慣の確立や新聞記事に関心をもって世の中のことを知ろうという姿勢をもつ生徒が増えた。 ・多くの生徒が部活動や課外活動に積極的に取り組み、また検定試験にも意欲的にチャレンジした。  (第3学年) ・学習を中心とした生活サイクルは確立させることができた。多くの生徒が遅刻・欠席することなく登校し、学習に専念することができた。ただ、早期に進路決定した生徒に対するモチベーションの維持には課題が残った。 ・学習指導を優先した結果、服装・頭髪については指導する機会が減少したが、目に余るほどの乱れは見られなかった。 ・2年間を通して、折に触れ、社会性の涵養、自己の向上につながる指導が継続できた。生徒は2年間とは異なった期間を通して、折に触れ、社会性の涵養、自己の向上につながる指導が継続できた。生徒は2年間とは異なった期間を通して、折に触れ、社会性の涵養、自己の向上につながる指導が継続できた。	・自転車のダブルロックを来年度は重点目標にしたいと思う。 ・下校時刻の遵守については、4月に部顧問で校門の立ち番もやっというように呼びかけていきたい。  (第1学年) ・高校生の段階で身につけておくべき姿勢や態度を学ぶ上で、「メタ認知」の力を修得させる。  (第2学年) ・見通しをもって、計画的に物事を進めていく力、正しく判断し行動できる力をもった生徒の育成を引き続き行っていく必要がある。  (第3学年) ・「伊高生」のあるべき姿を早い段階で示し、それに向けて自らを省みさせる機会を多く設定することが肝要である。
○生徒会活動	・各種委員会の活性化 ・伊高祭の進化 ・部活動の活性化	・体育の部のリーダー活動の見直しを図る。 ・文化の部の文化的な意識の向上と見直し及び文化部からの意見集約を行う。 ・九州大会、全国大会出場が出来る部活動を増やす。 ・課外活動の時間を確保し、文武両道を達成できる環境作りを努める。 ・下校指導を各部活動で担当し、下校時間の厳守、学習への切り替えを促す。	・生徒のリーダー性を養成するために、教育活動全体を通して生徒の主体性と自主性を向上させる取組を立案・実践していく。 ・部活動の活動時間については、学校全体や各学年での行事の立案段階で確保できるように努めていく。 ・下校時刻については、全職員の共通実践を徹底することで、時間厳守の定着化を図っていく。 ・文武両道を実現するために、生徒がより意欲的・主体的に部活動へ取り組めるよう、教職員が指導力向上に研鑽を積んでいく。	B	・伊高祭体育の部ではリーダーの数と応援合戦時間の見直しによって、リーダー活動の活性化を図った。文化の部では展示部の活性化など、見直しが必要な部分がある。 ・総体ではベスト8・ベスト4以上の部活動が増え、また、総文祭でも各々が素晴らしい結果を残した。野球の選抜甲子園出場や、吹奏楽部の九州大会出場など学校の大きなアピールにもつながる成果をあげており、部活動の活性化によって学校を活性化していくことも今後の課題である。 ・一方で、部活動内でのトラブルも多い。学校を休みがちになるケースも出る可能性があるため、相談体制の強化が必要である。 ・下校指導はまだまだ守れていないところがある。部活動の時間を長くしたければ始まる時間を早くするなど工夫が必要である。	・伊高祭については計画不十分どころもあって進行がスムーズにいかないところもあった。また、準備段階でも部活動などに迷惑をかけた部分があり、計画と準備の綿密さが必要である。 ・部活動についてはさらなる活性化とトラブル防止の観点から、もう少し定期的なリーダーズセミナーのようなものを行う必要がある。部長の悩みや本音を吸い上げ、顧問と共有することで部活動の活性化につなげていく。 ・完全下校時間については、さらに顧問と生徒の意識を上げる必要があるため、完全下校のチェックなどを定期的に行う。	

③ 情報モラル教育の充実							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○情報モラル・リテラシー教育の充実	・正しい知識の理解と利活用における実践	・他人に迷惑をかけず快適に情報機器を活用するための知識や技術を身につける。 ・SNS等でのネット犯罪に巻き込まれないようにする。	・情報の授業だけでなくそれぞれの授業を通し、正しい情報機器の活用について指導を行う。 ・ホームルームや集会で機会あるたびに注意を喚起する。また、講演を実施し正しい知識を身につける機会を設ける。	B	・情報モラルについての講演や掲示物、プリントの配布等を通して、携帯電話やスマートフォンの利用の仕方について注意喚起や指導ができた。講演後の生徒の感想では、98%の生徒が「情報モラルに対する意識が高まった」と回答した。 ・一方で、1学期より2学期の方が、携帯電話・スマートフォンの家庭での利用時間が増加していた。	・家庭での携帯電話・スマートフォンの使用時間について保護者と一緒に考えるよう指導していく必要がある。 ・更に、講演やホームルーム活動で情報モラルについて正しい知識や態度を身につける指導を行っていく。
	○情報セキュリティ教育の充実	・学習用PC及びパスワード等の管理 ・個人情報の管理	・毎日の学習用PCの持ち帰りを徹底する。 ・パスワードや個人情報の管理を徹底し、ネット犯罪等に巻き込まれないようにする。	・日々のホームルームや授業を通し、自己管理の大切さについての指導を行う。 ・集会や講演を通して正しい知識を身につけさせ、自己責任の重要性を考えさせる。	B	・学習用PCを忘れてきたり充電切れだったりして、予備のPCを借りに来る生徒が多かった。 ・また、自分のパスワードを忘れ、再発行をしてもう生徒も多かった。	・学習用PCの持ち運びを含め、機器の管理をしっかり行う指導をする必要がある。 ・また、パスワードの重要性を認識させ、個人情報の管理について注意する意識を高めさせる必要がある。

④ 本年度の重点目標に含まれない評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針の周知	・学校教育目標の周知 ・キャッチフレーズの周知 ・本年度の重点目標の周知	・学校評価アンケートのそれぞれの項目で周知率を80%以上にする。	・学校から発信する情報(ホームページ、はちがめ便り等)を通じて紹介する。 ・毎日のホームルームや集会の際に話題に取り入れて生徒に對話をする。 ・保護者に対して、後援会総会や学年保護者会等の機会に紹介する。	A	・学校評価アンケートでの保護者の「校則・学校経営ビジョン」の周知度は87.4%、「重点目標」は70.8%だった。 ・また、キャッチフレーズについては、各教室に掲示したり、学校通信(はちがめ便り)に毎回掲載するなどして、生徒や保護者に浸透した。	・更に多くの学校から発信する情報や配布物を通して、学校の教育目標やキャッチフレーズの周知を図っていく必要がある。 ・キャッチフレーズを生徒・保護者・職員が周知することで学校の活性化につなげていく。
	○開かれた学校づくり	・魅力あるホームページの構築 ・広報紙の定期的発行・配布	・ホームページ利用可能な保護者の70%、近隣中学生の80%以上の利用を目標とする。 ・後援会総会の出席率を50%以上にする。	・ホームページの新着情報を充実させ、最新の情報を提供する。 ・広報誌「はちがめ便り」を月1回のペースで発行し、地域や中学校への情報発信を拡充する。 ・後援会総会の内容を充実させ、複数回案内文書を出したり、生徒や支部の役員を通じて参加の呼びかけを活発にする。	B	・学校行事や生徒の活動を中心に、できるだけ最新の情報を確かな時期に提供できた。 ・学校便りも、生徒の最新の活動を中心に、定期的に発信できた。 ・後援会総会の出席率は50%台であり、目標の数値を超えることはできた。	・具体的な方策は継続し、生徒の個人情報の取り扱いには細心の注意を払いつつ、よりいっそう充実した内容になるように努めていく。 ・後援会総会については、より一層出席率を上げるため、入学式や役員会など様々な機会を通して粘り強く呼びかけていく。
	○教職員の資質向上	・各種研修会の実施 ・分掌会議、教科会議の充実	・校内で実施する研修会や講演等への職員の参加率を90%以上にする。 ・毎週の分掌会議、学年会議、教科会議の時間を有効に活用する。	・生徒の指導に不可欠な各種研修や指導力の向上につながる研修を各分掌で企画タイムリーに実施する。また、生徒対象の集会や講演会にも職員も参加し研鑽の場とする。 ・各会議で個々の抱える課題について議論し組織的に協力して問題解決に取り組む体制作りを心がける。 ・各教科で研究授業や公開授業を実施し、互いに教科の指導力向上に努める。	B	・出張等不在の職員以外はほぼ全員が校内での研修会や講演会に参加できている。 ・毎週の分掌会議、学年会議を実施し、情報共有ができていた。教科会議については、生徒の学力向上及び教職員の指導力向上のために、更なる研究や研修を進めていく必要がある。	・引き続き生徒の指導に必要な研修や職員のニーズに応じた研修を実施しなければならないが、情報の共有と行事の調整が必要である。 ・教科会議で指導の工夫や学力分析を行ったり、積極的に互いに授業を参観したりして、指導力向上について教科内で研究する必要がある。

●は共通評価項目、◎は共通評価項目のうち特定課題

4 本年度のまとめ・次年度の課題							
<p>&lt;本年度のまとめ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校教育目標については、広報誌や学校ホームページ、またアンケート等を通して、生徒・保護者・外部に対し概ね周知が図られたが、重点目標については、特に生徒への周知が不十分であった。生徒の学習に対する意欲の醸成が必要である。</li> <li>・「学力の向上」については、各教科や各学年において日常の授業改善を含む進学指導に様々な方策を立案して取り組んだが、なかなか実績に反映されなかった。より効果的な指導法の研究及び実践が必要である。</li> <li>・「自己有用感の育成」については、教職員がその重要性を理解し、様々な教育活動の場面で実践することができた。一方で、3件のいじめ事案が発生した。いずれも初期対応を迅速に行ったことで早期に解決することができたが、自他ともに敬愛の精神を醸成するための方策を充実させる必要がある。</li> <li>・「情報モラル教育の充実」については、朝のホームルームや終礼、学年集会等で計画的・継続的な指導は実践できた。しかしながら、SNSの不適切な使用による問題事案も発生した。メディアリテラシーも含め、心の教育を推し進める必要がある。</li> </ul> <p>&lt;次年度の取組&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者や地域社会との連携を深め、地域の信頼に応えることのできる普通科進学校づくりを推進していく。</li> <li>・学力向上を重点に、生徒募集のための方策を含めた学校活性化のためのプロジェクトを立ち上げ、魅力ある学校づくりを推進していく。</li> <li>・各務分掌及び各学年の取組、教科指導、部活動指導、生徒会活動、部活動、広報活動等、あらゆる教育活動や教育実践に対する指導法や方策の蓄積を図り、学校の組織力の向上を推進していく。</li> </ul>							